「天国の宴の先取り」

マルコによる福音書１４章１２－２６節

森島　牧人　牧師

今日の聖書は先回にも読みましたが、弟子たちが主イエスに何処で過越の食事をするのかと問うところから始まります。それに対する主の答えは「都へ行きなさい。すると、水がめを運んでいる男に出会う。その人について行きなさい。その人が入って行く家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言っています。』すると、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために準備をしておきなさい。」というもので、言われた二人が都へ行くと、何もかも主が言われた通りであったと、聖書は記しています（マルコ１４：１３－１５）。この記述から、主が事前にすべてを用意されていたこと、主はこのことを通して既に御自分の歩むべき道、ヴィア・ドロローサ（ラテン語で苦難の道）を見ておられたことが分かります。この記述はさらに、来るべき受難の日のために必要なものはすべて神から与えられていることを、主イエスが知っておられること、神は世の中の良いものや悪いものの一切を用い、動かして計画をお進めになることを明らかにしています。

こうして二階の大広間で「最後の晩餐」と呼ばれる過越の食事が始まったのですが、これは特別な形式によるものではなく、ごく普通の食事の中にもたれていることが分かります。私もユダヤ人の過越の食事の席に着いたことがありますが、それは淡々とした普通の過越し際の食事でした。欧米の教会の中には、随分と重々しい聖餐もあって驚いたこともありますが、今日の聖書を見ると、主と共にいただく聖餐は、日常性の中にあり、その中で神の恵みが与えられるのであることを思わせられます。そんな通常の過越の食事の中で、主イエスは「聖餐」の意味を教え、「わたしの記念として行うように」と言われたのです。

この過越の食事の直前、主はユダの裏切りを予告されますが、その前後でもユダを排除せずに十二弟子として行動を共にさせられています。つまり、裏切る可能性を持つ者を含んだ十二人（１２は完全数）が、弟子の集団であったということです。また、主が裏切りを予告された時、弟子たちが口々に「まさかわたしのことでは」と言ったとありますが、裏を返せば「私ではない」と断言する自信が弟子たちにはなかったということでありましょう。この主の晩餐にユダもいたということは、何度も何度も主を裏切っている私たちにも聖餐が与えられるということと同じことで、つまりそのことを知り、ここにいてもいいのかとの不安を自覚するという形での＜罪の告白＞があってこそ、聖餐は意味のあるものになるのです。

今日の箇所の二つの段落は本来別々に伝承されたものを一つの流れにしたと思われますが、それには意味があります。聖書には「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。『取りなさい。これはわたしの体である。』また、杯を取り、・・・」（同１４：２２－２４）とありますが、ここで重要なのは「取りなさい。これはわたしの体である」という御言葉で、またマタイ２６：２６には「これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。」との主の御言葉であります。十字架の出来事によって、肉と血を私たちに与え、私たちがそれを取ることによって血による契約がなされる・・・これは、「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。・・・」（エレミヤ３１：３１）とのエレミヤの預言が主イエスの十字架の出来事に繋がっていて、エレミヤの預言である神の約束は、主の十字架の出来事によって成就するということを、示しているのです。

神の前に正しい者など一人もいないにも関わらず、私たちが聖餐に与る者とし立っていられることの証拠は、＜主イエスの十字架＞にあります。そして、「体を、血を与えよう」と言われる主は、この十字架の出来事の一点に御自身の御生涯の意味があると言われているのです。

聖餐は、私たちが主イエスに結び付けられた神の子であること、主の血と肉を共有する信仰の家族であることを象徴するものです。そしてさらに、主と共に座り、主の食卓をいただくということとは、単に主イエスと繋がり、イエスの弟子としているということだけではなく、将来の天国の宴に繋がる、すなわち＜天国の宴の先取り＞をしていることになるのです。それ故に聖餐に与るということは、私たちの喜びであり、希望であるのです。

（説教要約　羽入田悦子）